知的障害者「退行」の気付き

指標作り活用目指す

「退行」の指標づくりに向けて模擬テストを行う

神奈川県小田原市の社会福祉法人宝安寺社会事業部（大水健晴理事長）は、知的障害者の高齢化による「退行」を客観的に評価する指標作りに取り組んでいる。退行による変化に早くから気付くことで、その人の心身の状態に合った支援に役立てるのが目的だ。今年度中の完成を目指している。

（榎戸新）

宝安寺社会事業部（神奈川県）

退行は加齢により生活動作ができなくなったり、認知機能が衰えたりすることを指す。知的障害者は意思表示の難しい人が多いため、周囲の人が退行に気付くことが重要で、障害者の高齢化が進む中にあって現場では切迫した課題となっている。大水理事長は「支援者が退行に気付く目線を持たないといけない。支援方法を変えれば、生活を長く楽しく過ごすことができる」と話す。

ただ現状では「転びやすくなった」など職員の記憶で判断するケースが多く、退行に関する全国的な指標もない。そのため、職員が退行を客観的に判定できる指標を法人独自に作ることにした。

昨年11月、11人のプロジェクトチームを立ち上げ、月1回、会議を開いて意見を出し合った。最終的に①身体機能・能力、感覚②病気・病理③認知・言語理解④日常生活動作・生活習慣⑤情緒・感情、興味・関心――の5区分・各10項目の指標案をまとめた。

退行がうかがえる知的障害者を対象に、判定できる、できないだけでなく、ジェスチャーによる表現、考えている姿勢なども評価し、4段階で行う。結果を前回と比べることで退行を把握する。

例えば、身体機能・能力、感覚の項目「10個のアイロンビーズから一つだけつかむ」では判定は「つかめない」「複数個つかめる」「やっと一つつかめる」「難なくつかめる」の4段階で行う。認知・言語理解の項目「5枚の絵を見て、覚えて10秒後に言う」では判定は「無回答」「1枚言える」「3枚想起して言える」「5枚想起して正解を言える」の4段階。ほか情緒・感情、興味・関心は、数カ月間の日常の記録も参考に判定する。

プロジェクトリーダーの吉澤宏次・ほうあん第二しおん所長は「退行と分かるだけでも支援者の関わりは変わる。指標による判定はアセスメントにもなる」と話す。また、本人のできない部分を把握して支援することや、客観的なデータによる家族への説明などにも指標を活用できるという。

現在、判定する際のマニュアルを作成中。まとまったものから試行し、実効性がある指標に仕上げていく。ある程度完成すれば外部に発表し、他法人の意見も聞きたいとしている。